

七夕の決意

いわき市立湯本第三中学校 1年 橋本 想央

先輩の肩が大きく揺れている。土のついた手のひらで、何度も涙をぬぐっているのがわかる。野球部の三年間を締めくくる大会は、一回戦敗退となった。結果は1対0。本当に惜しかった。気温三十度の中、もう出てくる汗もないくらい全力で戦う先輩達はとてもかっこよかった。これから僕らは、先輩達と同じような戦いができるのか。先輩達を超えることはできるのか、自宅に帰ってもその不安は消えることはなかった。

翌朝、ニュースを見ていた母が驚いた声で「66対0って野球でそんなことあるの？」と言った。歯磨きをしながら僕も画面に目をやる。そこには、「青鳥特別支援学校歴史的15アウト！初の単独出場も66対0で敗退」の文字があった。

僕は映画の話だと思って、「弱小チームがはい上がる話でしょ。なんか人気出なさそう。」と言った。「違うよ！昨日の試合結果だよ。東京予選の話みたいよ。」と母が言う。すごく気になったけど、学校に行く時間になってしまった僕は、玄関で靴を履きながらニュースから流れる音を聞いていた。

帰宅後、僕はこの試合の情報を探した。母の言う通り、これは実話だった。特別支援学校とは、様々なハンディキャップを持つ生徒が学習や生活上の困難を克服し、自立を図るために通う学校だ。都立青鳥特別支援学校には野球部がある。全国高校野球地方大会へは、去年の夏は連合チームで、今年は史上初めて単独チームで出場を果たしたそうだ。試合時間は5イニング三時間十分。青鳥のヒットは一本。僕は気が遠くなった。僕達が野球をしていた昨日、あの暑くて苦しかった時間帯に同じように戦っていた。新聞やテレビで見る彼らの顔はどの場面でも笑顔であふれていた。一つアウトをとるたびに、選手はもちろん、スタンドの応援団や球場にいる全ての人が拍手を送っている。青鳥のキャプテンは、みんなの声援が気持ちよかったです。仲間と野球ができて楽しかった、と言っていた。

ハンディキャップのある生活というもの僕は知らない。学校に行くことも普通、部活を選んで入部することも普通。宿題もあるし、テスト勉強もやらず

ちゃというこの毎日すべてが普通だと思っていた。気分によっては、大好きな部活すらも面倒だと思ふことがある。今、そんな自分を初めて恥ずかしいと思った。

やりたいことができる、たくさんの中から選べるということは、とても贅沢なことなのだと初めてわかった。

青鳥野球部は、ただただ野球がやりたかった。点差なんて関係なかったのだと思う。練習通りにフライがとれた。一塁まで走ることができた。怪我なく最後まで試合ができた。その一つ一つが、僕らと彼らの「普通」を近づける出来事。そして、青鳥野球部を試合に出場させてあげたいと力を尽くした周りの人達の熱意にも、僕は心が震えた。特に、対戦した相手校が最後まで手加減することなく全力で戦っている姿は忘れることができない。この姿を見て、僕は寄り添うことの意味を知った気がする。僕が教わってきた、自分より弱い人には親切に、とか手を差し伸べよう、ということ以上に違うなにかを感じた。

やりたいことができるような環境を作る。向かい合った相手の顔を見るよりも、相手が何を見ているか、何を见たいのか、同じ方向から同じものを見ようとする気持ちが大切なのではないか。青鳥野球部員の、最後まで全員で野球がしたい、というとてもシンプルな願いに、相手校は同じ野球人として応えた。この気持ちがまさに寄り添うということなのではないか。本気には本気で応えることが、人と人なのではないか。

もう彼らは、次の試合に向けての練習を始めているに違いない。僕も負けてはいられない。先輩達が欲しかったものを僕らが必ずとりにいく。青鳥野球部も、次は一点を取りにいこう！そして、もう歴史的なんて言わせないで、みんなで野球ができることを当たり前にしていこう！

僕にできることは本当に小さなことかもしれないが、相手がだれであっても、さりげなく、あたりまえに寄り添うことのできる人間に、僕はなりたいと思う。